

認知症（Dementia）その3

市川治療室 NO.361.2018.08

認知症の原因は「高齢（老化）」と「病気」になります。

誰でも年齢を重ねることは避けることができないものですので、「高齢（老化）」による認知症を予防することは簡単ではありません。

認知症の原因となる「病気」は「アルツハイマー病」、「血管性認知症」、「混合型認知症」と「レビー小体型認知症」に分けることができます。

1・アルツハイマー病

β （ベータ）アミロイド蛋白というタンパク質（水に溶けにくい）が脳内の神経細胞の周りに「しみ」（老人班）として蓄積する。

そして約 20 年後に、矽と呼ばれるタンパク質が神経原繊維変化として神経細胞の中に蓄積し、神経細胞の働きを障害します。

しみ（老人班）や神経原繊維変化は、脳内で作られる老廃物ですが、それらをうまく処理できなくなると脳内に蓄積されるようになります。

β アミロイドは「しみ＝老人班」の成分ですが、血管壁にも蓄積して、血管の働きを障害し小さな脳梗塞や脳出血を引き起こしたりすることも分かってきました。

2・血管性認知症

血管壁がもろくなった結果、詰まったり破れたりして認知機能が低下したものです。

血管壁の障害原因は、動脈硬化を引き起こす病気で、高血圧、資質異常症、喫煙、心房細動や老化が挙げられます。

3・混合型認知症

アルツハイマー病と血管性認知症が混ざった認知症です。アルツハイマー病と診断された 80 歳以上の方の約 3 割が血管性認知症の要素を持っていると言われています。

4・レビー小体型認知症

α （アルファ）シヌクレインというタンパク質が凝集して、神経細胞の中でレビー小体という塊を作ることで認知症を招きます。

パーキンソン病（アルツハイマー病の次に多い神経変性疾患）は、 α シヌクレインが神経細胞に蓄積する病気です。この状態が脳に広がると認知症を発症します。

レビー小体型認知症の特徴は「幻視」ですが、パーキンソン症状や起立性低血圧など自律神経障害を伴うこともあります。

（東京都健康長寿医療センター 脳卒中科部長 金丸和富先生資料から）

…続く